

# 荆溪湛然の戒律観

利根川 浩行

中国天台宗第六祖湛然の戒律観については多方面より検討されねばならないが、本稿では中国天台初祖智顛及び日本天台宗初祖最澄との比較による湛然の戒律史上の位置、また、大乘戒に関する湛然の独自性の二点に論点を絞つて考究したい。

先ず、智顛・湛然・最澄三師の諸著述をみると、三師共、小乗戒を認める説(イ)と、大乘戒優位を明かす説(ロ)を見ることが出来る。

智顛(イ)三帰五戒十善二百五十。皆是摩訶衍。豈有麁戒隔妙戒。(法華玄義・大正三三・七一八上)

(ロ)他云。梵網是菩薩戒。……若作別円菩薩解者可然。(同七一七下)

湛然(イ)戒無大小由受者心期。(止観輔行・大正四六・二五五上)

(ロ)若正立円戒須指梵網。(法華文句記・大正三四・三一九中)

最澄(イ)得業以後。利他之故。許仮受小律儀。(山家学生式・伝教

荆溪湛然の戒律観(利根川)

大師全集一・七頁)

(ロ)我日本天下。円機已熟。円教遂興。(依憑天台宗序・同三・三四三頁) 大師告諸弟子等言。……自今以後。不レ受声聞之利益。……棄捨二百五十戒已。(叡山大師伝・同五附録三二頁)

即ち、智顛は諸戒を相待判と絶待判とから分別し、相待判によれば梵網戒は別円独菩薩の戒なりとし、絶待判により小戒も妙戒なりと開会する。これに対し、湛然は「受者の心期」を問題として、小乗戒をも大乘心を以て受持すればよいと解釈し得る表現をする一方、梵網戒を円戒と定めてこれを重視している。最澄に至つては、条件付きで小戒仮受を認め、遂には小戒棄捨へと展開するのである。

更に、湛然の戒に関する主張を探ると、

今戒爲行本猶是小乘。棄而不持大小俱失。(輔行・大正四六一六二中)

五戒報人八十報天出家大戒感小解脱……菩薩律儀八万細行報

得二仏果一（十二門戒儀・卅統一〇一―一五頁）

出家菩薩具足堅持二毘尼篇聚一。大乘教意。一切皆然。（文句記・大正三四・三四三下）

等の説を見ることが出来る。これらからも、湛然が持戒を重視したこと、諸戒の中で菩薩戒を優位に置いたこと、一方では篇聚の戒を受持すべきとしたこと等を知り得る。

特に留意すべきは今の資料中、文句記の文には続いて、但此土器劣且二以三小檢二助三成大儀一（同）

と説いていることである。この説は逆に云えば、此の土の器劣ならざれば大儀のみにて可なり、と理解することが可能であり、これが最澄の円機已熟説、小戒棄捨宣言へと受けつがれたと見ることもできる。

「此土器劣」と述べていることから知られる如く、湛然の戒律観を理解しようとする時、当時の出家僧侶の有様をも考慮に入れる必要があるろう。これについて湛然の目から見た当時の僧風に関する記述を探ると、

今時僧衆不レ以二戒律一在レ心者恐レ滅二弘法一（維摩略疏・卅統一―二八一―二〇〇頁）

有言二大乘何須レ執レ戒者謬矣一。（輔行・大正四六・二六二上）

今出家人戒定慧心二無レ所レ修一（維摩疏記・卅統一―二八一―四一三八一頁）

との説があり、当時の出家僧侶に持戒心の無いこと、大乘仏

教においては戒に執すべきでないと言く人がいること、戒定慧三学をおろそかにしていること等を説いて湛然がこれに批判的態度をとつていたことが知れる。

以上のことを考慮に入れながら、次に大乘戒の受持と云う点について、智顛と湛然とを比較してみたい。智顛は

廻向具足無上道戒者。即是菩薩於諸戒中。具二四弘六度一。發願要心廻二向菩提一。故名二大乘戒一。（法華玄義・大正三三・七一七上）

と説いて、大乘戒が四弘誓願と六波羅蜜との関連において受持されねばならないとしている。湛然が

出家菩薩六和十利与二声聞一同。六度四弘異二於小行一。（輔行・大正四六・二五四上）

大乘律儀四弘為レ本立心縁境三聚為レ懷レ弘道但是三聚之果故四弘三聚更互相資（維摩疏記卅統一―二八一―四〇一頁）

と説く点は智顛の説をそのまま受けたものであり、四弘と六度が大乘戒との関連において説かれることは容易にうなづけるものである。しかし、湛然は更に、

此四信須レ約二円乘一。謂二一体三宝一念十戒。方二為二円門四弘之首一。（文句記・大正三四・三〇六下）

不レ了二一体三宝常住。不レ聽二出家言。言二不聽一者。若不レ解レ此戒不レ具足（輔行・大正四六・三〇九上）

令縁於一体三宝發四弘誓。進受菩薩清淨律儀。（金剛錍・大正四六・七八六上）

處<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>廣明<sub>二</sub> 一 体三宝<sub>一</sub> 爲<sub>レ</sub>所依境<sub>レ</sub> 須<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>此境有<sub>レ</sub>別相住持<sub>レ</sub> 用<sub>レ</sub>之也  
(十二門戒儀三門・卅統二一〇一—一五頁)

等とあり、一体三宝と大乘戒との結びつきが強調されている点、注目する必要がある。

智顛も

法才王子及涅槃中退転菩薩、從<sub>レ</sub>初<sub>レ</sub>已來<sub>レ</sub> 歸<sub>レ</sub>依<sub>レ</sub> 一 体三宝<sub>一</sub> 熏<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub> 戒善。有<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>法<sub>一</sub> 無捨<sub>レ</sub>法<sub>一</sub> (摩訶止觀・大正四六・三五中)

と説くが、必らずしも大乘戒との結びつきを述べているわけではない。更に、一体三宝について智顛、湛然の説を探ると、

〔釈箋〕第五下四十六左〇次<sub>二</sub> 三宝

九類通<sub>二</sub> 一 体三宝<sub>一</sub> 者。眞性即<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>宝。觀照即<sub>レ</sub>仏<sub>レ</sub>法。資成即<sub>レ</sub>僧<sub>レ</sub>宝。(天台大師全集・法華玄義三・六七〇頁)

とある。これは法華玄義三法妙中類通段の文であるが、留意すべきは「類通三宝」でなく「類通一 体三宝」としていること、湛然がこれを注するに単に「次三宝」としていることである。三種三宝中他の別相、住持に触れていないことは説明不足の感を抱かせる。このことは三宝と云う時、一 体三宝を重視すると云う了解が既にあったとも推測される。

次に、湛然が何故に大乘戒との関連において「一 体三宝」をとり、「三 帰」を用いなかつたのか考察したい。智顛は

仏法以此三 帰爲<sub>レ</sub>本。通<sub>レ</sub>究<sub>レ</sub>一切<sub>レ</sub>戒品及<sub>レ</sub>出世<sub>レ</sub>善法。(法界次第初門・

大正四六・六七〇下)

荆溪湛然の戒律觀(利根川)

と、三 帰戒が仏法の根本であり、一切戒律の初門であるとしている。しかし、麁戒と妙戒とを判する時、この三 帰が麁戒であることは冒頭に挙げた資料より明らかであり、湛然も、初列中三 帰者。即以<sub>二</sub> 三 蔵三宝<sub>一</sub> 而爲<sub>二</sub> 三 帰。(輔行・大正四六・二五三中)

と説いて、三 帰を藏教の攝としている。これらの点より、湛然は三 帰を大乘戒と結びつけることを控えたのであろう。そして、

三宝於<sub>レ</sub>是現<sub>二</sub> 世間<sub>一</sub> 者。亦約<sub>二</sub> 漸始<sub>一</sub>。且在<sub>二</sub> 小乘<sub>一</sub> 未<sub>レ</sub>論<sub>二</sub> 一 体。(文句記・大正三四・二五二上)

と説かれていることから、三宝が一 体三宝と規定された時大乘の位置が与えられることを知るのである。ここにおいて湛然が大乘戒と一 体三宝を結びつけた理由が理解できる。

以上のことから湛然の戒律觀は単に戒理論からのみでなく、当時の出家僧侶のあり方をふまえた上に成り立っていることが知れる。即ち、持戒を軽んずる風潮に対して、仏道修行の基本である戒の重要さを説き、大乘戒を優位に置きながらも、小戒の受持を勧めたのである。そして、湛然のこの仏道基本の重視が持戒に際して三宝との関連を説く所以であつたろう。戒と三宝において一 体三宝を用いた理由は今述べた如くであるが、湛然の行者の機根をふまえた戒律觀は最澄の大乘戒独立運動へ少なからぬ影響を与えたであらう。